

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2

ミュージアムの収蔵品58

『躍る人々』

巻頭
つれづれ

3

初代館長・加藤周一さん没後5周年

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5

三角型の力学構造の永続性

スリランカの古代溜池文明から学べるもの

立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐〕ここが
見どころ

7

地階展示：沖縄における核模擬爆弾

立命館大学国際平和ミュージアム副館長
山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕運営委員
リレー連載

8

国際平和ミュージアムの課題と今後の展望

ー社会へのアピールだけでなく、構成員へのアピールもー

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
加藤 雅俊〔立命館大学産業社会学部准教授〕ミュージアム
おすすめの
一冊

9

ハンナ・アーレント著 大久保和郎 ほか 訳

『全体主義の起原』（全3巻）（みすず書房 1972年、1974年刊）

立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

ミニ企画展

10

開催報告（2013年10月～2014年2月）

事業報告

11

- 特別展 世界報道写真展2013
- 2013年度 秋季特別展 目・耳・WAR—総動員体制と戦意高揚—
- 第60回不戦のつどい「わだつみ像」前集会／ロビー展示「学徒出陣70年 学生・大学と戦争」
- 文字・活字文化の日「平和って なに色？」
- 第3回ボランティアガイド学習会
- NGOワークショップ報告（2013年度 第2回）
- 第13回附属校平和教育研究会

18

- 第20回日本平和博物館会議に参加して
- 京都・大学ミュージアム連携事業について
- 立命館附属校平和教育実践展示に関わって
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第9回 神奈川県立地球市民プラザ（あーすぶらざ）
- ボランティアガイド活動日誌
- 立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 布川 庸子
- 2013年度入館状況（2013年4月～2014年1月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE立命館大学
国際平和ミュージアムKyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『躍る人々』



表紙
縦27cm／横38cm
年代：1943年



15枚目
処分を受ける妙子



16枚目
路上でおしゃべりする妙子

防諜協会推薦、原作 藤村禮子、絵画 菅野祐作、東亜国策絵芝居協会製作、全20枚の紙芝居です。

1935年頃、東京で子どもむけの客寄せとして始まった街頭紙芝居は、瞬く間に全国の都市に広がります。それは、毎日100万人の子どもの目を見ていたといわれるほどの大人気でした。そのため、紙芝居の持つ情報伝達力や教育宣伝力には教育界や宗教界、さらに軍や政府もすぐに注目しました。そして、様々な創作活動や経済活動が統制される中、紙芝居もまたその対象となります。1940年代には紙芝居は大人を相手に国策を宣伝するための装置になり、そうした目的の印刷紙芝居が大量に作られました。この資料は、職場や隣組などで上演して「防諜」についての意識を啓発し、国民がとるべき行動を示す紙芝居です。

日中戦争が起きた1937（昭和12）年以降、軍機保護法の改訂など秘密の保護に関する取り締まりが強化され、1941（昭和16）年には国防保安法などもできて秘密保持は厳密になっていきました。1941年以降は、平たく言えばスパイ活動に当たる「諜報」を「防ぐ」ため情報漏洩の取り締まり強化や「防諜」の重要性を宣伝する啓発活動が行われました。

1941（昭和16）年からは防諜週間が設けられて展覧会が開催されたり、生活信条に「防諜」を盛り込み、隣組で徹底させる通達を行うなど軍と政府が一体になって取り組みました。国民すべてが「防諜」の担い手とされ、そのために必要な行動をとっているかどうか互いを監視しあう態勢になりました。「防諜」は、防空法でも規定されている国民の義務でした。

戦局を推測できるような情報を漏らすとそれがスパイの手に渡り、敵を利する。戦争に対する否定的な発言はスパイの人心攪乱の材料になる。こうした考えのもと、人々は情報へのアクセスが制限され、自由な発言は取り

締まりの対象となりました。

『躍る人々』の舞台は東京、主人公は丸の内の国策会社で働くタイピストの妙子です。現在で言えば丸の内のOLです。話好きの妙子は会社の前で、靴磨き（かつては街頭に靴磨きが沢山いました。現在は空港などでみかけます）の留さんに「空襲がある気がする」「南洋から沢山の軍需品の注文が来たから忙しくなる」などと話をします。そして、このような情報はデマとして広がります。妙子は、敵に情報を与えないように行動を慎めと兄から諭されて反省をしますが、社長は当局から注意を受け、妙子に謹慎処分を命じます。妙子は情勢について記載がある書類は屑屋（古紙回収業者のこと）に渡さずに自分できっちりと処分する面もあるので考え直して欲しい、と靴磨きの留さんが社長にとりなし、処分はなくなり、妙子は事なきを得ます（靴磨きが社長に直談判するのは当時の状況からは不自然ですが）。

物語の最後は聴衆に向けて、「皆さん、お互に覚えはないですか」と問いかけ、これらのちょっとした会話が、当人の知らないうちに敵に情報を与えたり、戦意喪失のためのデマの流布につながる恐れを説き、「大東亜戦争を勝つために私たちは、ただの一人でもスパイの手先にならぬよう、国家あればこそ自分の自分という事を忘れないようにお互いに気をつけようではありませんか。」と国家の利益を最優先することの重要性を説いています。

タイトルの「躍る人々」は、情報戦の中で気が付かぬうちにスパイに操られて行動する人々を意味したものでしょう。しかし、現在の私たちから見ると、情報へのアクセスの道を閉ざされ、発言の自由も奪われて当局に操られた人々についての物語であり、大変皮肉です。特定秘密保護法があいまいな内容のまま成立した現在、私たちは再び躍らないように、これまで以上の注意や努力をしなければなりません。

（学芸員 兼清順子）

初代館長・加藤周一さん没後5周年

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安斎育郎

(立命館大学名誉教授)

■館長・加藤周一の誕生

1992年5月、経営学部の雀部晶教授らとともに国際平和ミュージアムの設立準備に当たっていた私は、大南正瑛・立命館総長に呼ばれました。ミュージアムの初代館長として加藤周一さん（国際関係学部客員教授）を迎えたいので、「館長代理」に就任して貰えまいかということでした。私は一も二もなく承諾したのですが、加藤さんは、当時、都立中央図書館の館長をお務めでしたし、執筆、教育、講演、調査、情報整理、思索などで時間はいくらあっても足りない日々でしたから、實際上、館長業務にどれ程の時間が割けるのか、私には訝しく思われました。

実は、2008年12月5日に加藤さんが亡くなられた後、膨大な蔵書やノート類が立命館大学に寄贈されることになったのですが、東京のご自宅に伺った大学の担当者は、受賞されたメダルなどがダンボール箱に無造作に入れられていたことを発見しました。加藤さんは、「権威」とか「肩書き」といったものには価値を見出さない方でした。それだけに、ミュージアム館長を引き受けられたこと自体が、私には「意外」に感じられたのですね。

加藤さんは、ミュージアム館長への就任を受諾するに際して、「安斎さんが一緒なら」というご意向だったように聞きました。当時、加藤さんと私は立命館大学国際関係学部の同僚で、私は、加藤周一さんを囲む会（白沙会）の代表でした。それに、加藤さんは、私が自然科学概論の授業や講演活動などで、科学と非科学の狭間ともいうべきいわゆる「超常現象」と言われるものを、時にはマジックを実演しながら解き明かしていたことに少なからぬ関心を示し、「僕はあなたのファンですから」などと声をかけてくれていました。多少なりとも気心が通じ合っていたのですね。1995年、翌年に開館を控えた長崎原爆資料館から総合監修作業を依頼された時も、加藤さんは、「安斎さんが一緒なら」という条件で引き受けられました。いくらか信頼されていたからでしょうから、とても嬉しいこと

ではありますが、それだけに「なかなか大変なことになった」と思いました。もちろん、加藤さんには、大好きな京都にある立命館大学が客員教授として迎えてくれたことに対する返礼というほどの意味も込められていたかもしれません。

■『加藤周一最終講義』のこと

2013年12月20日、京都のかもがわ出版から『加藤周一最終講義』という本が出版されました。この本には、佛教大学、白沙会、（中国の）清華大学、立命館大学での加藤さんの最晩年の講義・講話・講演が含まれています。一読すれば、加藤さんの身は滅びても、該博な知識を踏まえて時空を縦横無尽に跳躍する加藤流思考法は、今なお鮮度を失わずに生き続けていることが分かるでしょう。



『加藤周一最終講義』（かもがわ出版 2013年12月）

同書出版直後の12月22日、編集者の呼びかけで、加藤さんの没後5周年を記念する集まりが国際平和ミュージアムで開かれました。出席希望者が殺到したので人数制限をしたそうですが、当日は、長野県や山口県など、遠方からも熱心な加藤周一ファンが押しかけました。

この本の中で加藤さんは「二分法」(ダイコトミー)について論じています。そして、人間の生の営みの舞台である時間と空間について、時間的には「持続と変化」、空間的には「中心と周辺」という二分法を取り上げ、それらをさらに統一的に理解する方法について考察しています。問題を京都に引きつけて論じている加藤さんの論法はとても興味深いので、ぜひ原本をお読み下さい。

ところで、「二分法」というのは、考察している問題を2つの要素に分けて立論する方法で、「9・11事件」後のジョージ・ウォーカー・ブッシュ第43代アメリカ合衆国大統領のように、「要するにテロリストの味方なのか、アメリカの味方なのか」と迫るような危ない使い方もされます。

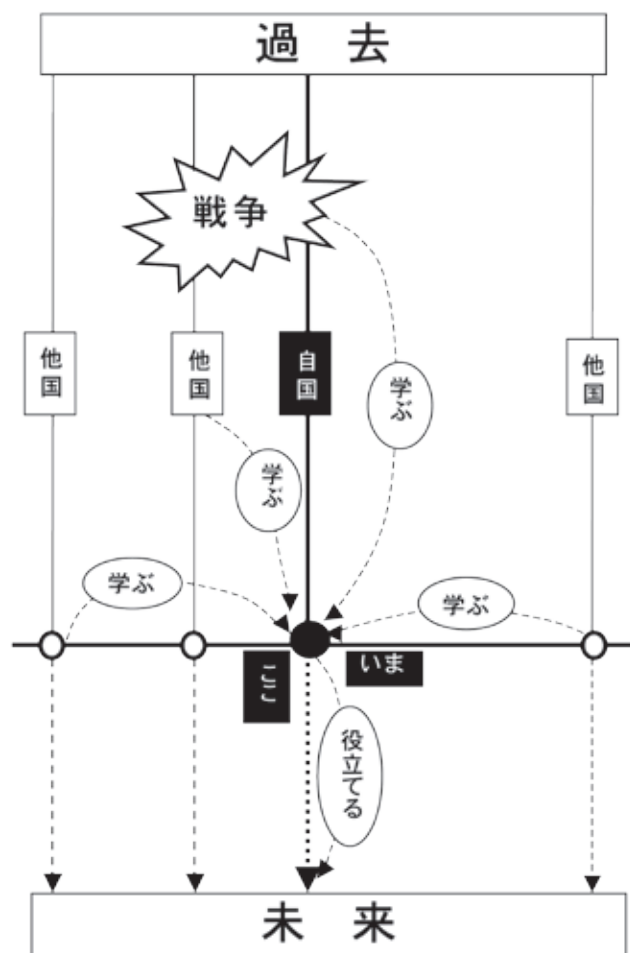
古稀越えの平和ミュージアム名誉館長である私としては、身の程の限界を自覚しながら、最近は、「私が責任を負うべき問題」と「私が責任を負うべくもない問題」とに分ける二分法が気にかかっています。

私は、時間軸の上では「1940年」という時代に、空間軸の上では「日本国」という場所に生を受けました。それは私が選べなかったことであり、当時日本が戦争政策をとっていたことについては責任を負うべくもないでしょう。物心ついて社会に影響力を行使できるように成長するまでは、社会の基本的なあり方について責任を負うべくもなかったとも言えるでしょう。だから、「私が責任を負うべき」範囲は、狭義には、私が「公民権を保障された時期と地域」ということになるかもしれませんが、広義には、「私が生きることによって“社会のあり方”や“人との関係性”に影響力を行使できるようになった時期と地域」ということになるでしょう。それは公民権が与えられる前の時期も、日本の国外も含まれると思います。人間は初めは「受動的」ですが、成長に伴ってだんだん「能動的」「主体的」になり、周りの人間関係や社会のあり方に影響を及ぼすことが可能になります。

図をご覧ください。私の人生は「黒丸(●)」で示さ

れており、縦軸で示される時間軸の上ではこの範囲内でしか責任の負いようがありません。横軸で示される空間軸の上では、折に触れて外国に行って講義や講演をしたり、外国の新聞のインタビューを受けるようなささやかな形で、主たる生活圏である日本以外にも責任を負うべき範囲が少し広がっています。私は、過去の戦争の時代を含む歴史上の様々なことを学び、他国で起こっている様々な出来事や習慣や考え方について学び、そこから私なりの教訓を得て、未来の社会づくりに可能な影響力を行使しようともがいています。まあ、時間軸の「いま」と、空間軸の「ここ」に規定されたケシ粒のような人生ではありますが、少しでも「いま」と「ここ」の制約を飛び越えた普遍的な何かを生み出せたら、それは●の外に影響力を及ぼすことが出来るという点で、実人生以上に生きたことになるのかもしれません。

初代館長の加藤周一さんを思い起こしながら、まだこの人は時間的にも空間的にも生き続ける存在なのだと、改めて感じています。



三角型の力学構造の永続性 スリランカの古代溜池文明から学べるもの

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐)

■ 地域社会の暗黙知の継承

この間、「ノーベル賞級の大発見」と言われている日本の若手女性研究者、小保方晴子さんのSTAP細胞の論文を名門科学誌『ネイチャー』が掲載したニュースを見て考え始めた。母国スリランカでの子どもの頃、友達と一緒によくパチンコで高い木の上にあったマンゴーを狙ったとき、小鳥に当ててしまったことが浮かんできた。射落とした小鳥の傷ついた足や羽に、ウコンの粉をかけて薄めた酢で濡らした包帯を巻いてやると、比較的早く怪我が治り、再び自然に小鳥を放したことを思い出した。このことを誰が教えてくれたのかは、いまだによく覚えていないのだが、当時のスリランカの悪ガキたちに、代々伝わってきた子どもの慣習でもあり、知恵でもあった。長い間、ウコンの粉の治療効果だと思っていたが、STAP細胞の記事を見ると、薄めた酢の刺激が治療の秘訣だったのかもしれない。地域社会の暗黙知の継承によって、蓄積してきているものについて、我々が知らないことは多いと感じた。地元の知恵を、もっと有効に平和構築に活用する方法はないかと思い始めた。私の母国スリランカでは、その暗黙の知恵の溜まり場の一つは北中部の古くからある村社会である。

■ スリランカの溜池文明

スリランカの北中部では、UNESCOが登録する世界文化遺産が多く存在する。その大半の建設は、古代からある溜池農業の経済効果のお陰だと言われている。スリランカの北中部には、多くの巨大溜池と、川や人工水路でつながっている小さい溜池が点在している。改めて、古代文明を作り上げた経済力と技術革新に感動する。流域間をつなげる水路は、外部エネルギーを導入せず、30キロ程度の距離で水を逆流させている例もあり、大きい人工溜池は琵琶湖の三分の一ぐらいの規模である。紀元前から豊かな米作文化を支え続けた古い溜池のそばに立って説明が書いてある看板を見ると、流域面積、水量、水深等について書かれていて、最後にさりげなく、「設立・紀元前2世紀」と書かれているのを見ると鳥肌が立つ。

「ワンニ（Vanni）地方」と呼ばれていたスリランカの北中部の溜池の後背地にある古い村では、当時シンハラ語とタミール語は混在していた。古代都市ポロンナルワ王朝時代では、シンハラ王室や貴族の間のコミュニケーションは、教養の高さを示すためにタミール語の詩で行なわれていたと言われている。この共存の技はなぜ消えてしまい、4年前まで30年近く続いたタミール系のゲリラ軍との戦いは、両民族の血だらけの戦場となったかを考えると、再び鳥肌が立つ。

■ 「ウェルウィダーネ」の役割 — 三角型の力学バランス

2000年間続いた都と村で形成されたスリランカの溜池文明の繁栄の秘訣は、村社会の統治構造と水資源の維持管理システムに深い関わりがあった。溜池や用水路の建設は、村人全員の共同作業だった。その維持管理と村の経済の中心であった米作農業の推進にあたっては、次の3人が重要だった。「村長」と村の「長老会の会長」と「水資源管理の責任者」（シンハラ語で「ウェルウィダーネ」）である。長老会は村長を考慮し、村長はウェルウィダーネを任命する。この仕組みは村の統治構造の基本であり、バランスよく、19世紀の後半に大英帝国の植民地になるまで続いた。古代スリランカの村の統治構造の政治経済的力学は、今日の民主主義国家の三権分立のようにスリランカの村社会を安定させた。三角型の力学のバランスであった。その秘訣は、ウェルウィダーネの役割にあった。ウェルウィダーネは、溜池や水路の維持管理と村人への水の公平な分配をする責任者で、その報酬は村の総収穫の一部だった。ウェルウィダーネは、どのように村に安定感を与えたかを見てみよう。

ウェルウィダーネは、優秀な農家だけに水を優先的に分配し、村の総収穫を増やせば自分の報酬も当然増える。スリランカ北部の乾燥地帯の村で困った農民たちは、そういうときに不公平な分配に当たると、ウェルウィダーネをおろすように村長に陳情するだろう。このような状況が起きないように、ウェルウィダーネは用心深く公平な分配に努める。優秀なウェルウィ

ダーネは、村の財産であり、人気者だった。そこで、もし村長が不安がってウェルウィダーネを妬み、おろすようなことをすれば、村民が長老会長に陳情し、村長を辞任させたりするだろう。このような力学のバランスを保証し、スリランカの古代文明を支えた村社会は、2000年以上にわたって安定してきたと言われている。

16世紀の半ばから19世紀の半ばまでポルトガルとオランダの植民地であった300年間、この構造を維持し続けてきたが、大英帝国の植民地時代になって、ウェルウィダーネの職を廃止することになる。英国の植民地政府はその役割を果たすことになるが、三角構造の安定感がなくなり、スリランカの村の崩壊が始まる。その崩壊と共に、豊かな米作地域の経済力も低下し、弱体化した村社会は植民地政府に従属することとなる。

1948年の独立後、新たに溜池や用水路を復元し、再び豊かな農村をよみがえらせる努力をするが、独立後のスリランカ政府は英国政府の役割を担うだけで、先ほど述べたような安定した三角型の力点のバランスを持った構造の良さを見落とすこととなった。

スリランカの長い内戦の終結を迎えたとき、私は多数派のシンハラ系と少数派のタミール系の民族間の信頼回復に溜池を中心にして復興計画を立てられないかと考え、国際協力銀行（JBIC）に提案したこともあり、それが日本の復興支援事業の一つになったこともあった。民族、言語等の背景を超えた溜池文化の力を感じた。高い志のもと、乾燥地帯で貴重な水資源を皆のために、最適に活用しようという取り組みだった。社会的に公平であり、経済的に最適であった秘訣は、三つの力点のバランスを保証する社会システムであった。私は、この政治経済的力学構造をあらゆる課題解決に展開できると思う。

かつて国連の職員として、ある東南アジア諸国の奥地の村に行ったことがあり、その村の経済構造を思い出すことができる。土着の村人は、真珠を採り、華僑

の商人にそれを納めていた。いったん見たときは、その地域の住民が貧しく、華僑の商人が豊かに見えたが、よく調べてみると、華僑の商人が利益の一部を与党の政治資金として寄付し、その与党がその一部を国家主席の交付金として先の村に還していた。この安定した構造のもとで、どのように摩擦を少なくして社会構造を改善し、村人を豊かにすることができるかを考えた。もう一つの買い手を導入すれば新たな市場が形成され、村人にもっと正当な値段で真珠を買ってもらえると思った。

だがその買い手は、だれでもよいとは思われなかった。国家主席と与党が日本の開発協力を求めている、日本の買い手を歓迎し、結果として日本の買い手を入れることとなった。多少、華僑の商人の寄付金が減っても、日本からの援助額は、それをはるかに上回っていた。結果として、住民の生活は数年の間に豊かになった。このような提案も、三角型の力学を理解し、解決策を見つけようとする努力と言えるだろう。

これから社会的変容を行うときに、数多くの場面で三角型の力学構造が考えられる。STAP細胞やiPS細胞を活用した治療を本格的に始めることを念頭に置くと、専門医と患者と厚生労働省の間の対話のもとで、行動指針を形成することが想定される。そのときも、三角型の力学のバランスをどのように保証できるかを考えるべきだと思う。



ポロンナルワの巨大な溜池（パラークラマ・サムドゥラ）

ポロンナルワは、スリランカ文化三角地帯の最東の一角をなす大遺跡群の拠点で、インドのチョーラ王朝の侵略によってアヌラーダプラを追われたシンハラ王朝が10-12世紀に二番目の首都をおいた場所です。

ポロンナルワの首都の構築に尽力したのは、パラークラマ・バーフ1世（Parakrama Bahu I）で、彼の治世の間、ポロンナルワは交易と農業が栄え、黄金時代を迎えます。特に灌漑設備の充実に努め、国の東部地域における乾季でも農耕を可能にしました。彼は農耕と防衛の両方の目的で、首都の周囲にパラークラマ・サムドゥラ（パラークラマ海）と呼ばれる巨大な灌漑用貯水池を建設し、首都は自給自足の体制を保ったといわれています。今日、古都ポロンナルワはスリランカ随一の考古学上の史跡として維持されている一方、スリランカー清潔で美しい町として知られ、自然に囲まれた環境や古都の建築、青く輝くパラークラマ・サムドゥラが観光客を魅了しています。（スリランカ政府観光局ホームページ「古代都市ポロンナルワ」<http://travel-srilanka.jp/>）

地階展示：沖縄における核模擬爆弾

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根 和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

国際平和ミュージアムの地下室の展示の中に、「核模擬爆弾」があります。これは核兵器を落とす練習用に沖縄の伊江島で米軍が使っていた核模擬爆弾で、ベトナム戦争で使うことを想定していました。島袋正秀氏が寄託されたものです。「核模擬爆弾」について詳しくは、国際平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎氏著『ビジュアルブック 語り伝える沖縄』（全5巻）に書かれています。ベトナム戦争中、沖縄の米軍基地からは爆撃機が飛び立ち、また海兵隊や特殊部隊の訓練、射爆場での演習などが行われました。伊江島では核兵器の投下訓練まで行われ、その時に使われていた核模擬爆弾の本物が国際平和ミュージアムに展示されています。



核模擬爆弾（島袋正秀氏 所蔵）

沖縄には、沖縄県平和祈念資料館、対馬丸記念館、ヌチドゥタカラの家、ひめゆり平和祈念資料館、南風原文化センター、うるま市立石川歴史民俗資料館、佐喜眞美術館のような平和のための博物館・美術館があります。

伊江島にはヌチドゥタカラの家という平和資料館が、1984年12月8日に阿波根昌鴻（あはごんしょうこう：1901-2002年）氏によって設立されました。ヌチドゥタカラとは『命は宝』の意味です。彼の著書には「戦争中、われらはあまりにも命を粗末に考えておった。二度と戦争をおこさないためには、何よりも命を大事にすることである。戦後になって、非常に反省しました。」とあります。

彼は1925年キューバに移住し、その後ペルーに移った後、1934年に日本に帰国しました。沖縄戦では、一人息子を失いました。デンマーク式農民学校を建設して農民が学びながら働くことができるように努力しましたが、その学校は沖縄戦で奪われてしまいました。ようやく訪れた平和もつかの間、今度はその土地を米軍に奪われたので、土地を米軍基地として使用することに反対する活動を続けました。ヌチドゥタカラの家へ行きますと、伊江島で米軍が使っていた核模

擬爆弾、有刺鉄線、戦争中の生活用品や遺品、米軍の銃弾、標識、立て看板や戦争直後の生活用品などの戦争に関連した遺品、また平和のため活動した人々の足跡を紹介しています。悲しい戦争の体験から平和を願ってこの平和資料館を設立し、暴力を使わないで奪われた土地を取り戻すために努力した阿波根昌鴻氏は、「沖縄のガンジー」と言われました。ヌチドゥタカラの家の入口付近の壁には、次のように書かれています。

すべて剣をとる者は、剣にて亡ぶ
基地をもつ国は、基地で亡び
核を持つ国は、核で亡ぶ

平和のためには戦争の原因を学ばなければならないという阿波根氏の考えに基づき、日本の侵略など加害の展示もされています。この平和資料館は日本だけでなく、海外でも高く評価され、海外からの訪問者もいます。

1998年には、『教えられなかった戦争・沖縄編 阿波根昌鴻・伊江島の戦い』という記録映画が製作されましたが、その映画で彼の反戦・平和の活動を知ることができます。

また参考になる文献として、上記の『ビジュアルブック 語り伝える沖縄』があり、〈第1巻〉「沖縄のいま、むかし」、〈第2巻〉「沖縄戦はなぜおきた?」、〈第3巻〉「島ぐるみの悲劇の戦争」、〈第4巻〉「美ら島と米軍基地」、〈第5巻〉「命どう宝のころ」という内容です。

また阿波根昌鴻著の『米軍と農民―沖縄県伊江島』、『命こそ宝―沖縄反戦の心』も、胸に響く本です。国際平和ミュージアムの展示をきっかけにして、これらの本を読むことをお勧めします。



ヌチドゥタカラの家の入口

このページは都合によりご覧いただけません

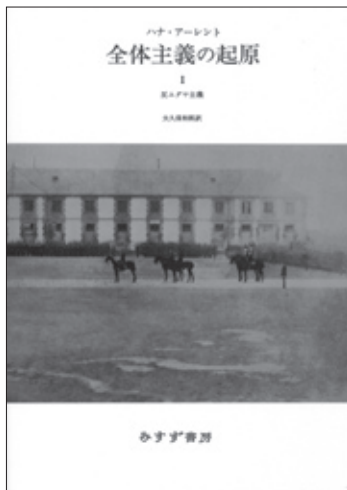
『全体主義の起原』（全3巻）（みすず書房 1972年、1974年刊）

ハンナ・アーレント著 大久保和郎 ほか 訳

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 加 國 尚 志

（立命館大学文学部教授）



『全体主義の起原』（大久保和郎・大島通義・大島かおり訳 みすず書房 全3巻）は、最近、伝記的映画『ハンナ・アーレント』（マルガレーテ・フォン・トロッタ監督）が上映され、多くの観客がその生涯に触れることになった哲学者ハンナ・アーレントの大著です。

20世紀の世界を考えると「全体主義」体制が民衆を苦しめた時代であった、ということは言うまでもないことでしょう。ナチス・ドイツや戦前の日本、またスターリンのソヴィエトから戦後の社会主義国家に見られた「全体主義」とはどのようなものだったのか、ということについての考察を抜きに、私たちは私たちの生きている世界について本質的な理解をもつことはできません。西洋近代に生まれた国家体制が、いくつかの国家において20世紀になって「全体主義」というかたちをとるようになったのはなぜなのか。『全体主義の起原』は、こうした問題に切りこんでいきます。

たとえば「人種主義」や「帝国主義」は、必ずしも「全体主義」的ではない国家にも見られました。ナチスが標榜した反ユダヤ主義はフランスなどにもありましたが、帝国主義ということについては、ドイツや日本は後発国でした。

ハンナ・アーレントは全体主義に特徴的な組織として「秘密警察」の存在を挙げています。秘密警察の存在は、人々の言論活動を抑圧し、身の安全のために権力の横暴を黙認する態度を生みだし、最後には人々は無関心になってしまいます。

多くのドイツ市民が、ユダヤ人たちの身に何かが起こっていることをうすうす知りながら、それを話題にして秘密警察に逮捕されることをおそれて黙認し、最後にはそれが日常的な態度となって、ユダヤ人の存在への無関心となった、ということはよく知られています。アーレントは、全体主義体制における秘密警察支配下では、捕らえられた者がもともと存在していなかったかのように姿を消すことに市民が慣らされていった

と記しています。人種主義が強制収容所のような政策として機能するためには、良心的な市民を黙秘と無関心、あるいは忘却に押し込める秘密警察の存在が必要だったのです。強制収容所での虐殺をはじめとする全体主義の政策が可能だったのは、警察を利用した秘密主義が存在したからだとも言えるでしょう。

こうした秘密主義に加えて、全体主義の特徴として混乱した官僚主義が挙げられます。全体主義における官僚行政は、党と国家の二つの権威にまぎれて、不明確なものとなっていました。支配機構の権力の中心がわからず、官庁や機関が増大し、官僚の専門性や責任が不問に付され、現場が混乱に陥ってしまうのです。

結局このような官僚主義においては、党のシンパである行政官僚による無責任な政策が広まることにより、行政機能が混乱におちいるものとなりました。誰も責任をとらず、誰が発案したのかもわからない法律や政策が、次から次へと朝令暮改のように改められて、行政の現場が混乱に陥って、機能しなくなってしまうのです。

私たちは全体主義国家が、専制的な権力の遂行の強力な形であるかのようなイメージを抱いています。ナチスが「例外状態」を宣告し、権力の遂行に有利な、市民による批判や討議はもちろん、政策上の敵対者も存在しない状況を生み出し、第一次大戦後のドイツの経済を「復興」させ、大衆の人気を勝ちえたのは事実です。しかし、アーレントの指摘は、そうした全体主義国家が、最終的には合目的な考慮を失うことによって失敗に終わることを教えてくれます。アーレントは、それを全体主義国家の「無構造」性と呼んでいます。

『全体主義の起原』では日本は考察されていませんが、秘密警察の存在や無責任な官僚主義は、戦前の日本にも共通するものだったように思われます。特高警察や軍部官僚の存在を考えてみれば、このことはわかるでしょう。むしろその点では、15年戦争以降の日本はドイツに先駆けてさえいたのかもしれませんが。

そしてまた、たしかに戦後日本は日本国憲法によって民主化されましたが、いつでも戦前に逆戻りしそうな、秘密主義と無責任、そして無構造性の危険をはらんでいたと言えそうです。20世紀における全体主義を、国家における失敗した経験としてきちんと位置づけることができないままに21世紀を迎えて、失敗を失敗として認めず反復する愚かさを、アーレントの著作は教えてくれているのではないのでしょうか。

開催報告 (2013年10月～2014年2月)

今号では2013年10月から2014年2月の間に開催しましたミニ企画展をご紹介します。

第82回 「第7回立命館附属校 平和教育実践展示」 2013年10月13日(日)～2013年12月20日(金)

立命館附属校の平和教育実践展示は2007年度に第1回を開催し、今回が7回目の実施となりました。この展示は、展示物を通じて初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することで、今日の小学生、中学生、高校生の平和や人権課題に対する意識を広く知ってもらおうとするものです。2013年度は下記の日程で開催しました。

【日程と展示内容】

①立命館中学校・高等学校

会 期：10月13日(日)～10月25日(金)

テーマ：立命館中高における平和教育実践

内 容：中学2年生による沖縄平和研修の様子や、高校2年生による世界史の出来事を8コママンガで解説した課題研究報告、2011年に実施した中学2年生から高校3年生を対象としたカンボジア・タイでのボランティア研修の様子やその成果を展示。



立命館中学校・高等学校の展示の様子

②立命館宇治中学校・高等学校

会 期：10月27日(日)～11月8日(金)

テーマ：日中韓の中高生の平和に向けての交流

内 容：日中韓の中高生約130名が参加した「第12回東アジア青少年歴史体験キャンプ」の様子と、参加者全員で作成した「平和友好宣言」、高校1年生の近現代史プレゼンテーション、中学2・3年生の国際平和ミュージアム訪問レポート、中学1年生の日本の都道府県、世界の国調べを展示。

③立命館小学校

会 期：11月10日(日)～11月21日(木)

テーマ：平和ポスター展

内 容：立命科の授業の中で平和について系統的に学び、広島平和記念資料館訪問などの見学も経験した6年生児童一人ひとりが、平和への思いを込めて制作したポスターを展示。

④立命館守山中学校・高等学校

会 期：11月23日(土)～12月6日(金)

テーマ：立命館守山中・高の平和学習の取り組み

内 容：中学2年生による広島・大久野島宿泊研修での平和学習の取り組み、医療・技術・教育などの分野で国際貢献の経験を持つ講師を招いて行なう高校3年生の授業「国際協力」におけるプレゼンテーションの展示と、DVD上映による紹介。



立命館守山中学校・高等学校の展示の様子

⑤立命館慶祥中学校・高等学校

会 期：12月8日(日)～12月20日(金)

テーマ：北の立命から発信「世界に通用する18歳になるために」

内 容：中学2年生の「メッセージタワー」、中学3年生の「戦時下の1人 レポート」と「平和学習ディスカッションの成果」、高校1年生のフォトエッセイ「慶祥生が考えてきた広島・長崎」と生徒が考えた「平和宣言」(北海道被爆者協会2013年追悼式)、高校2年生のフォトエッセイ「世界で平和を考える」、高校3年生のレポート「アジア学 日中関係改善への意見」と「平和」をテーマに製作したバルサタワーの展示。

各附属校の展示の様子は、P.19でも紹介しています。

第83回 ミュージアム・この1てん 「ぜいたく夫婦よ さようなら」 ～『写真週報』第132号より～

会期：2014年1月10日(金)～2月2日(日)

『写真週報』は、戦時中、国の政策を伝えるために作られたグラフ雑誌です。2013年度秋季特別展「目・耳・WAR -総動員体制と戦意高揚-」のアンケートの中でも、この資料について当時の社会背景も含めて更に知りたいとのご要望が多かったため、資料(『写真週報』第132号(1940))にうつる夫婦を等身大にしたパネルや語句解説、当時の物価表などを交えて詳しく紹介しました。



『写真週報』第132号表紙 1940年9月4日発行
立命館大学国際平和ミュージアム所蔵

世界報道写真展2013 – WORLD PRESS PHOTO 2013 –

～立命館大学衣笠キャンパス (KIC) 会場～

会 期：2013年9月18日(水)～10月13日(日)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム
中野記念ホール

参観者：6,187名

公開記念講演会

演 題：『報道カメラマンの視点でみた世界の暴力
と戦争の構造と平和』

講 師：会田 法行氏 (フォトグラファー)

コーディネーター：池尾 靖志 (立命館大学講師)

日 時：2013年10月1日(火) 13:00～14:30

会 場：立命館大学衣笠キャンパス存心館701号教室

聴講者：284名

～立命館大学

びわこ・くさつキャンパス (BKC) 会場～

会 期：2013年10月15日(火)～10月31日(木)

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
エボックホール

参観者：2,132名

公開記念講演会

演 題：『報道カメラマンの視点でみた世界の暴力
と戦争の構造と平和』

講 師：会田 法行氏 (フォトグラファー)

コーディネーター：藤岡 惇 (立命館大学教授)

日 時：2013年10月22日(火)

第1回 10:40～12:10

第2回 13:00～14:30

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
コラーニングハウス IC303号教室

聴講者：第1回 204名、第2回 280名
合計484名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館

公益社団法人日本写真協会

公益社団法人日本写真家協会

京都府、京都府教育委員会

京都市、京都市教育委員会

京都市内博物館施設連絡協議会

NHK京都放送局 (衣笠キャンパス開催分)

KBS京都

滋賀県、滋賀県教育委員会

草津市、草津市教育委員会

大津市、大津市教育委員会

NHK大津放送局 (びわこ・くさつキャンパス開催分)

びわ湖放送株式会社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社



衣笠キャンパス会場の様子

～立命館アジア太平洋大学 (APU) 会場～

会 期：2013年11月3日(日)～11月17日(日)

会 場：立命館アジア太平洋大学 本部棟2階
コンベンションホール

参観者：2,188名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社
世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館

公益社団法人日本写真協会

公益社団法人日本写真家協会

大分県、大分県教育委員会

別府市、別府市教育委員会

NHK大分放送局、大分合同新聞社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

協 力：別府商工会議所、社団法人別府青年会議所
大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

2013年で56回目を迎えた「世界報道写真展」。立命館大学では1995年から毎年開催しています。展示される作品は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約160点で構成されます。

毎年、1月から2月にかけて前年に撮影された写真を対象にした「世界報道写真コンテスト」が開かれ、国際審査員団によって入賞作品が選ばれます。十数人から成る審査員団は毎年メンバーを替えて、審査の中立性を保つ努力がなされています。「第56回 世界報道写真コンテスト」には、124の国と地域、5,666人のプロの写真家から、合

計10万3,481点の作品が応募されました。

このうち32の国と地域から54人が、コンテストでの入賞を果たしました。

大賞には、スウェーデンの写真家ポール・ハンセン氏の作品が選ばれました。パレスチナのガザ地区でイスラエルのミサイル攻撃によって死亡した子どもたちを、絵画的な光の中で葬儀場所へと運ぶ様子を写した1枚には、人々の深い悲しみと怒りが凝縮されています。

ほかにも、東日本大震災から1年後の2012年3月、オーストラリアの写真家ダニエル・ベレフラク氏は岩手県陸前高田市で傷痕の癒えない町と人々の様子を撮影し、入賞を果たしています。ニュース性の高い混迷する中東情勢はたしかに多くの作品で見ることができですが、日本もまた世界の一角であり、震

災の記憶と爪痕を今も多くのジャーナリストが取材し続けています。

いずれの会場とも多数の方々にご来場いただきました。写真一枚一枚に向き合うことで、「世界で今、何が起きているのか？」を受け止め、「平和とは何か？」を考えていただく機会となりました。

会期中、今回の大賞作品の撮影地となったパレスチナでの取材経験のあるフォトグラファー会田法行氏を講師としてお招きし、公開記念講演会を開催しました。報道カメラマンの倫理コードを紹介し、報道カメラマンは常に中立な意識で取材を行い被写体と誠実に向き合うべき、という考えをご講演いただきました。会田氏がこれまでに撮影した写真のスライド上映とともにお話しいただき、聴講者は熱心に耳を傾けていました。

世界報道写真展参観者の感想 衣笠キャンパス会場

- 戦争や貧困、暴力など普段の生活では正直言って縁が感じられない。でも「無縁」だからといってそれぞれの出来事に無関心でいることは許されないと思った。中東での戦争もアフリカでの貧困ももちろん東北での震災も何かしらの形で実は私たちは関わっていて加害者になってしまっていることもあり得る。反省、という意味ではないが、現在の私たちの生活を批判的に捉え、生活のあり方を見直すために日々思考をよせていくことが必要だと考えました。

(本学学生、20代、京都市)

- 「今」の世界が写されているとは思えない作品が多くて驚いた。遠い時代のこと、遠い場所のことというように風化して欲しくないと思った。

日本の現状だけでなく、今世界はどのような姿をしているのかということを知り知る必要があると感じました。また、自分が知るだけでなく、このような写真展を通じて他人に「伝えていく」事が大切であると感じました。どの国で起こった事とこだわり過ぎず、同じ「地球」上で起こっていることであるという事を感じました。

(大学生、20代、京都府)

世界報道写真展参観者の感想 びわこ・くさつキャンパス会場

- 紛争など、こうして自分が生きている地球のどこかではこの瞬間も起り、そして命が失われているのだということを生々と感じ取ることができました。このような実際に起こる恐ろしい現実、テレビなどのメディアで報道されず、知る機会も少ないです。途上国だけでなく、アメリカなど先進国でも貧困はあり、それに苦しむ人々、また、一歩違う場所へ踏み入れば麻薬などの犯罪が頻繁に起こる地域もある、ということ写真を通して知ることができました。また同時に、自分にも何かできることは無いのかとただ写真を見つめながら思いました。

今回、世界の各地域で起こる現実(メディアなどの報道では

知ることにできない)を知るよい機会となりました。また、来年も開催されれば、絶対に来たいと思います。

(本学学生、20代、京都市)

- 初めて見た時、とてもショックを受け、以後毎年よせてもらっています。ほのぼのとする写真もありますが、心痛む写真の方が多く、びっくりするような事が世界の各地で起きているのだと強く思います。このような機会がないとなかなか知る事のない事項が知る事ができるのは、自分にとって良い勉強になります。感謝しています。

(淡海生涯カレッジ受講生、60代、滋賀県)

世界報道写真展参観者の感想 立命館アジア太平洋大学会場

- 世界報道写真展を開催していただき、ありがとうございます。毎年、この写真展へ足を運ぶことが、私の中で決定行事となっています。写真は言葉にはない表現力があり、視覚へダイレクトに情報を訴えかけてきます。今、世界で起きている「現実」が紙を媒体として迫ってくるさまには息をのみます。同時に、自分がどう生きるのか、改めて考えさせられる機会でもあり、濃い時間を過ごすことができました。来年の開催も期待しています。

(APU学生、20代、別府市)

- なぜ人間は武器を持つのだろうか。身を守るため、家族を守るため、国を守るため…。しかし、守るための方法は武器を持つて戦うことだろうか？地球をひとつの家族として考えることがなぜできないのだろうか。資源、エネルギー、土地…いろいろなものを分かちあって生きていくことが、地球規模ではできないのだろうか？

ポール・ハンセン氏の写真を見て、あまりにも悲しく残酷な現実に、言葉がありません。

(50代、大分県)

目・耳・WAR ―総動員体制と戦意高揚―

会 期：2013年10月23日(水)～12月15日(日)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

参 観 者：13,779名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

展示協力：京都工芸繊維大学美術工芸資料館

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会

NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞社



学芸員による展示解説

日 時：2013年11月16日(土)、17日(日) 13:00～13:30、15:00～15:30

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール内

参加人数：57名



展示の様子



学芸員による展示解説



映像学部自主ゼミ制作「ボクハ、ボウシ」

2013年10月23日(水)から12月15日(日)の約一ヶ月半にわたり、「目・耳・WAR―総動員体制と戦意高揚―」を開催しました。

1937(昭和12)年に始まった日中戦争から、アジア・太平洋戦争へと時局が変化するにつれて、国家と戦争への協力が市民生活の細部にいたるまで要請されました。

二十世紀は、発達した複製技術によって、写真や映画、レコード、大量の印刷媒体などが芸術のあり方や感性的経験を大きく変えた時代でした。大量の複製物は、芸術を大衆に普及させ、芸術への大衆の参加を容易にしました。

こうした複製技術による表現手段は、国家権力による一般大衆心理の誘導にも利用されました。日常的に目にする広告や娯楽としての音楽、子どもたちの遊具など、さまざまな媒体を通じて、視覚や聴覚に戦意高揚と国威発揚をうったえかける試みがなされました。当時の人々の生活は「感性の総動員」とも呼べる体制にあり、総動員体制は、芸術なども利用した巨大な「感性装置」でもありました。

本展では「総動員体制」「戦意高揚」のキーワードを中心に、「グラフ雑誌」「ポスター」「国策紙芝居」「遊び」「レコード」「ラジオ」「博覧会」「国策標語」といった展示コーナーを設け、一五年戦争期のポスターやチラシ、雑誌、絵はがきなどの視覚資料や、軍歌や歌謡曲などを収録したレコードなどの聴覚資料、すごろくゲームや紙芝居といった体験企画などの、感性に訴えかける約140点の資

料を展示しました。

この展示内では、立命館大学映像学部自主ゼミ6名が渡辺修司准教授の指導の下、企画・制作した体験展示「ボクハ、ボウシ」も実施。すごろくゲーム「帽子の戦争日記」と、ゲームで使用した帽子を飾る「帽子×平和＝」の二つの展示からなり、体験者自身で紙の帽子を組み立て、帽子の視点になって戦時中の暮らしの一部に触れ、現代を生きる自分たちとのつながりを感じることを目的としました。学生達は、ミュージアムと何度も打ち合わせを重ね開幕の日を迎え、最終的に集まった帽子は924個。展示期間中、大切に持ち帰る児童や生徒の姿もありました。

11月16日(土)、17日(日)には、各日2回ずつ計4回、学芸員による展示解説を行いました。展示趣旨の説明からはじまり、各展示コーナーごとに総動員体制下でどのような戦意高揚を狙ったしかけがあったのかということ等を解説しました。

本展を通じて、市民を戦意高揚へと導いた感性支配と大衆操作の技術についてふりかえり、批判的・反省的に再考する機会となったのではないかと思います。なお、本展では、京都・大学ミュージアム連携を通じ、京都工芸繊維大学美術工芸資料館にはポスターなど貴重な資料を貸与いただきました。ここに御礼を申し上げます。会期中よりご好評をいただきました本展の図録は、引き続きミュージアム地階受付にて販売しています。

特別展見学者の感想より

- 国民も気づかないうちに自分たちの戦争についての価値観を国から操作されていたことを思うと、客観的に見れば当時の日本はとても異様だと思った。現在のわたしたちも知らないうちに操作されている部分はあるかもしれない。また、次第に国民は操作されるだけでなく操作する側にもなっていたことは特に印象に残った。
(10代、本学学生、京都市)
- 当時の国民の戦争に対する意識を高めるために、政府はあらゆる手段を用いて行っていたということが分かりやすかった。一つ一つの展示物の説明文においても、「～ではないだろうか」とあくまでも1つの意見であることを述べ、我々、見る側に考えさせる問いかけのようになっていて、考える道しるべとなった。下の階の常設展示とも共通点があり見易かった。
(10代、本学学生、京都市)
- 映画の中では、主人公の戦いを応援するのが普通ですが、そういう感じ方に近いものが当時あったとするならば、自分も含めて、プロパガンダに流される可能性はあるのであり、とても恐ろしく感じました。国民の意識という面で、とても考えさせられ、勉強になりました。
(10代、本学学生、京都市)
- 戦争という恐ろしいものを雑誌やポスターを用い、ポップな感じで扱うことで戦争に対する民衆の意識をよいものにしたてようとする流れを感じた。多くの展示物を目にできたのでその流れの大きさを感じられた。
(20代、本学学生)
- 教科書などで「日本の社会が戦争に向かった。国民の意識を戦争に向けさせる工夫がされた」と書かれていても、どのような状況であったのか全く分からなかったのだが、当時の新聞や雑誌・子どもの遊び道具を実際に見て始めて戦争の雰囲気というもの理解できて良かった。
(20代、大学生、滋賀県)
- 戦争のためのプロパガンダが日常生活に浸透していた当時の空気が体感できた。子供向けのおもちゃや紙芝居にまでこういったものが浸透していたのが恐ろしく、不気味に感じた。
(20代、大学生、京都市)
- あやまちを繰り返さないために、歴史を学ぶ事は非常に重要。このような展示会がもっと広がり、若い世代へ正しい歴史を教えられるきっかけとなしてほしい。
(30代、会社員、京都府)
- 家族が満洲に行っていたので、当時の情勢が国民目線でもわかりより深く理解した。
(40代男性、会社員、男性)
- 民意を誘導、操作していくための資料として興味深かった。特に「アサヒグラフ」でのガスマスクを生産する工場の写真は異様だった。しかし、それが異様でなくなることで、意識の変容が出来るのであれば恐ろしい。
(40代、団体職員、滋賀県)
- 戦意高揚のためにこんなにも様々な手法が使われていたのかと改めて感じました。世の中がこのようなプロパガンダで一方向に向かうことは怖いことです。平和は一人一人の自由意志を大切にしたところに成り立つのではと思いました。
(50代、教育関係者、岐阜県)
- あたり前の日常がどの時代に生きる人にもあるはず。生まれ育つ時代を選ぶことはできないけれど、人として精一杯生きている。このような展示を見て、想像することしかできないけれど、世代を超えて今後も伝えていって下さい。
(50代、主婦、名古屋市)
- 国民総動員に向けて、いかに国民全体の意識を啓蒙していったのか、その手法が、胸にせまるようにわかった。もし、そんな状況におかれたら、自分なら、どうなるだろうか…。考えただけでも苦しい思いになりました。
(50代、公務員、大阪府)
- どの展示物を見ても、現代の視点からみたら何かこっけいですらあるものですが、これらが何の問題もなく子供から老人に至るまでスーッと入っていく、そんな時代を再来させてはならないと思います。
(50代、会社員、滋賀県)
- 戦争期の標語の多さやインパクトの強さ、またこれらの手法を使って、戦意高揚を図っていったこと、また大多数の国民が同調していったことがよくわかり、すばらしかった。
(60代、自営業、岐阜県)
- よくこれだけのものが残っていたものだと思いました。横書きは右から書いたと知っている世代なのに左から読んで何これと思い苦笑しました。こうして戦意高揚で、踊らされたのですね。憶えているものが一杯ありました。
(70代以上、京都府)
- 学芸員の方の解説をしてもらいながら、みることができました。非常にわかりやすく説明していただきました。昭和30年生まれの私も、やはりまだ戦前の戦意高揚の名残りともいうべき子ども時代の遊びをしていたことを大いに反省したところです。
(50代、会社員、京都市)

京大事件80年・学徒出陣70年・わだつみ像建立60年

第60回目を迎えた不戦のつどいの歴史―「像とともに未来をまもれ」

2013年は、京大事件から80年、学徒出陣から70年、わだつみ像建立から60年という年でした。1954年12月8日、像建立1周年を記念して第1回不戦のつどいが広小路学舎で開催され、風雪の歴史を重ね2013年12月6日国際平和ミュージアム「わだつみ像」前において、第60回不戦のつどいが開催されました。

ミュージアムでは、当時実行委員の一人であった本学卒業生の栃本吉之氏が挨拶し、第1回不戦のつどいを開催した時の状況、尽力した方々の想いを語りました。栃本氏は「私が第1回を開催して、その後60回も続けてこられたことが非常に大事なことです。後輩の皆さんも、平和への思いを持ち続け、これからも80回、100回と続けていってほしい」と語られました。

さて「京大事件」「学徒出陣」「わだつみ像建立」、この三つの出来事は、学園史のなかでもひとつの共通した歴史の流れのなかで、語り継がれることが大事です。

上田寛氏（法科大学院教授）によると、京大事件は「2年後の美濃部達吉貴族院議員の天皇機関説に対する著書発禁処分事件ともども、学問・思想の自由が弾圧された事件であった。」事件により京都大学法学部を辞職した先生方18名を、立命館大学が迎え入れることになり、「京大事件そのものは、強大な天皇制国家権力の前に敗北という形で終結したが、他方で立命館大学にこの事件がもたらしたものは大きかった。」その後、時代はファシズムと戦争の色合

いを濃くし、京大事件から10年後の学徒出陣によって10万人を超える学生が戦場に送られました。本学からも約3,000人の学生が出陣し、少なからぬ学生が命を落としました。「今日の時点から過去の歴史を振り返れば、思想信条の自由、学問の自由と大学の自治が失われたその時、すでに日本は破滅への坂道を駆け落ち始めていたのだと、明確に言い切ることができる。あの京大事件が一つの転換点だったことが明らかである。」そして「戦後の立命館大学の再建を指導されたのは京大事件の当事者の一人、末川先生であり、『平和と民主主義』の教学理念を象徴するものとして53年に建立された『わだつみ像』の台座に刻まれたことば、『像とともに未来をまもれ』は、歴史を振り返るとともに、その教訓を未来に生かすことの重要性を教えている。」と述べています。（「立命館大学法学部と京大事件」2003年10月24日 京大事件70年、学徒出陣60年、「わだつみ像」建立50年記念講演より引用）現代、大学は「二度と学生を戦場に送り出さない」、学生は「二度とペンを銃に持ち替えない」という決意を新たにする必要があります。



挨拶する栃本吉之氏

ロビー展示「学徒出陣70年 学生・大学と戦争」

会 期：2013年11月19日(火)～12月15日(日)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階ロビー

巡回展「学徒出陣70年 学生・大学と戦争」

会 期：2014年1月9日(木)～1月31日(金)
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
メディアセンター1階



びわこ・くさつキャンパス巡回展の様子

1943年10月、戦局の悪化に伴い、大学の学生や大学予科、高等学校、専門学校等の生徒（総称して「学徒」）の徴兵猶予が停止され、将来有望な多くの学徒が戦地へと出征しました。学徒兵は国家に

よって動員された被害者である一方で、侵略戦争の加害者になりました。それを強制した国家のあり方や大学の責任を問い、国内外のあらゆる戦争犠牲者に思いを寄せ、今一度「わだつみ 不戦の誓い」を新たにしていくために本展示を開催しました。

展示では学徒出陣に関する資料の中から、中村徳郎（東大）「最後の手紙」「日本戦没学生の手記」（わだつみ平和文庫）や林尹夫（京大）「出陣学徒遺稿ノートⅠ」、杉本芳樹（京大）「日々断想」（日記）、志賀庄一郎（立命館）出征の

「日の丸書き」、『戦時学徒必携』、当時の新聞（京都新聞、朝日新聞）、雑誌（週刊朝日）、関係写真12点を展示しました。

手紙や手記からは戦地へと赴くこととなった学徒達の内面をうかがい知ることができます。これらの資料から学徒達の出征に対する向き合い方もそれぞれであったことが伺えます。

手紙や手記に対して、新聞や雑誌等の報道資料には学徒出陣を巡る社会の様子が映し出されています。壮行会の熱狂ぶり、当時の岡部文相の学徒出陣に対するコメント等を見たとき、学徒達がこういった社会状況下で戦地へと送り出されていたのか知ることができます。

今回は手紙や手記、新聞などに残るこれらの事実について、多くの人により深く知っていただくために、直に触れることもできるレプリカの作成や文字の翻刻も行いました。

また、本展はびわこ・くさつキャンパスでも展示し、期間中に多くの学生や市民に見ていただくことができました。



学徒出陣壮行会に向かう立命館大学学生（1943年）
（立命館史資料センター準備室提供）

文字・活字文化の日 「平和ってなに色？」

「文字・活字文化の日」は、2005（平成17）年に制定された「文字・活字文化振興法」により10月27日と定められています。文字で表されたものを読み書きすることに親しみ、大切にしていこうという日で、国民の財産である、文字・活字文化を振興し、広く関心と理解を深めてもらうことを目的としたものです。

立命館大学国際平和ミュージアムと立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所とは、「文字・活字文化の日」特別共同企画として、平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色？ 漢字一字であらわす平和へのメッセージ」を、2013年10月27日（日）～11月3日（日・祝）に行いました。平和への思いを表す方法は様々ですが、この催しでは、平和への思いを一つの文字で表していただき、その一字にこめられたメッセージを記入していただきました。

会期中の見学者が多かったこともありますが、小学生のみなさんが多くのメッセージを寄せてくださいました。挙げられた文字は全部で64種類。同じ漢字一字でも、それぞれ思いや感じ方が違い、様々なメッセージ・コメントが寄せられました。

メッセージを書いてくださった方には、「平和ってなに色？」漢字カードを1枚ずつプレゼントしました。このカードは、白川静記念東洋文字文化研究所が制作したもので、色の名前10種類の漢字について、古代文字やその成り立ちなどを解説したものです。みなさんには、この漢字に込めた思いをいつまでも持ち続けてほしいと願っています。



漢字カードと平和へのメッセージ

「漢字一字で表す平和へのメッセージ」まとめ

総数 201のメッセージが寄せられました。

◆ランキングトップ5とコメント

- ①笑（19）…みんなが笑顔だと自分も笑顔になるから。（小学生）
平和に暮らすためには、みんなの笑顔が大切だと思ったから。（小学生）
- ②絆（17）…ひとりひとりがつながって、笑顔が絶えなくなりますように、という思いをこめて。（小学生）
絆を深めよう。世界中が平和になることを祈っています。（中学生）
- ③命（15）…命がなければ、人が生きていなければ、平和はつけない。（高校生）
- ④幸（13）…世界中の人々が幸せになったら平和になると思ったから。（小学生）
- 心（13）…自分の心を変えれば、見え方が変わったり、平和につながるいろいろなことが見えてきたりするかもしれないから。（小学生）

トップ5外から

- 助 …人が助け合うことは過去の過ちを二度と繰り返さないために必要である。（中学生）
- 永 …永久に、永遠に、未来永劫に、戦いなど無くなり、平和な世界になりますように。（高校生）
- 祈 …平和は祈り。祈りは願い。願いは想い。Love&Peace！（高校生）
- 生 …平和の前に生きていなければ平和を感じられないから。（小学生）
- 水 …空が雲一つないよく晴れた水色の空で、水も普通に飲めて、植物などにも水をあげられたら幸せだし、平和な世界だと思う。（小学生）
- 遊 …平和の中で遊ぶのが平和だと思う。（中学生）
- 好 …みんなを好きになれば世界が仲良くなり、「平和」になると思ったから。（小学生）

第3回ボランティアガイド学習会を開催

「子どもたちへの平和教育—“性奴隷制”をどう伝えるか」

2013年12月14日（土）にボランティアガイド学習会が開催されました。

今回の学習会は、立命館大学国際平和ミュージアムと立命館大学国際地域研究所「ジェンダーと平和・開発研究会」を主催として、「子どもたちへの平和教育—“性奴隷制”をどう伝えるか」と題して開催されました。

講師には、アクティブ・ミュージアム「わたしの戦争と平和資料館（wam）」館長の池田恵理子氏をお迎えし、ボランティアガイドのみなさんや国際関係学部学生などを中心に58名が参加しました。

以前より、ボランティアガイドのみなさんから、ガイドをする中で、展示室の「慰安婦」に関する展示や、「慰安婦」問題を子どもたちに伝えることの難しさについて、様々な意見や議論があったことを受けて、今回開催することになりました。

講演では、「慰安婦」問題についての日韓の教育の違いや、戦争と女性の被害について、子どもたちに短時間で、語ることでできる範囲で、事実をどのように伝えていくか、などのお話がありました。

質疑応答では、ボランティアガイドのほか、学生からも

質問や意見があり、女性の人権問題や、当時の「慰安婦」の実態などについて、熱心な意見交換や議論が行われました。

また、展示解説については、子どもたちの発達の度合いによっても説明の仕方が変わってくることを、分かりやすく伝えるために、展示の前で実際のストーリーを話す、など参考となるような意見も交わされました。

子どもたちだけではなく、他の世代にも展示解説をする上で、伝えることが難しいテーマではありますが、今後もこのようなガイド活動に役立つ学習会を開催していきたいと考えています。



学習会の様子

2013年度 第2回 NGOワークショップ 「与える支援から自立に向けての支援へ～コメ銀行を通して考えよう!～」

開催日時：2013年11月30日(土) 16:30～18:15
講師：平野将人氏
(日本国際ボランティアセンター ラオス事業担当)
場所：国際平和ミュージアム
2階ミュージアム会議室
対象：大学生、大学院生
参加者：20名
企画：国際平和ミュージアム学生ミュージアムスタッフ
北田万葉(文学部3回生)、竹本優貴子(法学部2回生)
西本成子(法学部2回生)、田中志穂(国際関係学部1回生)

NGOワークショップは、ミュージアムで活動する学生ミュージアムスタッフが主体的に企画・実施するものです。企画メンバーとなった学生たちは、国際平和ミュージアム常設展示室「平和をもとめて」第2展示室で紹介している12団体の活動の中から、興味・関心のある団体について意見交換を重ね、依頼する団体を

決定します。今年度第2回は、日本国際ボランティアセンター(JVC)より平野将人氏を講師に迎え、ラオスで取り組んでいる支援活動について、主に「コメ銀行」を取り上げ、以下のようなワークショップを実施してもらいました。①講義：スライドを使い、ラオスの農村の暮らしと「コメ銀行」の取り組みについて概説。②グループディスカッション：「コメ銀行」の活動がどうして必要なのか。この活動で肝心な事は何か。③各グループによる意見発表。④講師による総評。⑤グループ間の意見交換。⑥講師によるまとめ。

テーマへの関心の高さから、本学びわこ・くさつキャンパスで学ぶ学生を含む様々な学部からの参加があり、活発で有意義な議論が行なわれ、参加学生たちも充実した様子でした。企画した学生たちは準備から当日の運営に当たる中で多くのことを学んだようです。今企画で学んだことを、ミュージアム来館者への展示解説活動で、是非活かして欲しいと思います。



グループディスカッションの発表



講師の平野氏と参加した学生たち

第13回立命館附属校平和教育研究会を開催

2014年2月8日(土)午後2時から6時まで、「平和教育・平和博物館をつくり直す—子どもの発達段階、カリキュラムの観点から」と題して、各附属校のミュージアム専門委員会を中心に21名の参加を得て、第13回立命館附属校平和教育研究会を開催しました。

今回の研究会は、①子どもの発達段階に対応した平和教育・平和博物館のあり方、②初等中等教育の教育課程(カリキュラム)における平和教育の位置づけについて考えること。また、広島市立大学広島平和研究所の先生方の参加を得て、研究交流をすることを目的として開催しました。

初めに、村上登司文氏(京都教育大学教授)、竹内久顕氏(東京女子大学准教授)、竹本真希子氏(広島市立大学広島平和研究所講師)の3名の講師の方々に各30分の報告・問題提起をしていただき、それらを受けて参加者全員でディスカッションをするというものでした。今回、村上先生からは、子どもの平和意識とこれからの平和教育について、竹内先生からは、初等中等

教育カリキュラムにおける平和教育の工夫について、竹本先生からはドイツ平和運動史にみる「平和」について、ご報告ならびに問題提起を頂きました。その後ディスカッションでは、附属校での具体的取り組みや、立命館大学大学院応用人間研究科での「絵本」を使った教育の可能性など事例の紹介も頂きながら、活発に意見交換を行いました。現場での具体的な教育実践をまとめて公開することの重要性、現地の空気を感じる訪問など実物に触れることの重要性、今後、平和教育や心理学をまたぐ共同研究の重要性など参加者で共有しました。今後はテーマを絞って附属校平和教育研究会を開催していければと考えています。



附属校平和教育研究会の様子

第20回日本平和博物館会議に参加して

2013年11月7日～8日、埼玉県平和資料館（埼玉県東松山市）にて第20回日本平和博物館会議が開催されました。

1994年に発足した日本平和博物館会議は、日本の平和博物館10館が加盟し、情報交換や交流、協同の事業を開催するための会議です。今から20年ほど前は、埼玉県平和資料館、川崎市平和館、ピースおおさか（大阪平和国際センター）、そして当館などが相次いで開館し、戦争の記憶が風化する中で展示や教育普及活動を行う施設を作り、平和の大切さを伝えていこうという機運が全国的に高まった時期でした。以来、各館は特色ある活動を続けています。昨年は広島平和記念資料館にて加盟館のパネル展示が開催されました。また、本誌でも毎号、加盟館の紹介が掲載されています。

会議初日はフィールドワークから始まり、本年リ

ニューアルされた埼玉県平和資料館の展示見学と県内にある原爆の図・丸木美術館の展示見学が行われました。埼玉県平和資料館は展示室の他にも図書閲覧や資料検索コーナー、展望塔もあり、短い見学時間では足りない程の施設です。特に資料を種類毎に展示した分類展示室は圧巻でした。原爆の図・丸木美術館は、丸木位里、俊夫妻が描いた原爆の図の展示で、平野正樹写真展After the Factが開催されていました。

また、情報交換会では、平和博物館の相次ぐ開館から20年が過ぎ、平和博物館をとりまく状況も変化中、平和の大切さを伝える各館の活動を実施する上での現場の課題や、継続することの大切さについて参加者の話が及びました。2日目の討議では、2015年に戦後70年を迎えるにあたり、日本平和博物館会議の共同事業の可能性などについて議論されました。

京都・大学ミュージアム連携

「大学は宝箱！ー京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 博多」

会 期：2013年10月8日(火)～10月26日(土)

会 場：九州産業大学美術館

2013年10月、九州産業大学美術館にて「大学は宝箱！ー京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 博多」が開催されました。この展覧会は、「京都・大学ミュージアム連携」および「九州・大学ミュージアム連携」の各館の収蔵資料によるものです。当館は、1939年に中国大陸で従軍中に捕虜の虐殺場面を目撃した日本兵の「従軍日誌」や、清水焼の「陶器製手榴弾」などを出品し、見学者からは「考えさせられる内容だった」といった感想が寄せられ、九州の見学者にも当館の資料を通して平和について考えてもらう機会となりました。

公開記念シンポジウム「連携のカー大学ミュージアムの可能性」も開催され（当館兼清もパネリストとして参加）、各館の取り組みや、連携事業から、今後の大学博物館の可能性について探る議論となりました。

「京都・大学ミュージアム連携」では、2011年度から2013年度にかけて市内の大学博物館が連携して（文化庁「文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）」、シンポジウム、スタンプラリー、合同展覧会などを開催し、大学博物館の魅力を発信するとともに収蔵品を通して京都の文化の活性化にも寄与してきました。これは日本初の大学博物館の連携事業であり、九州や関西における大学博物館の連携事業のモデルとなっています。

現在は京都・大学ミュージアム連携の包括協定締結に向けた準備が進められており、京都の大学博物館の躍進が期待されます。



展示の様子（於 九州産業大学美術館）

「京都・大学ミュージアム連携」ホームページ
<http://univ-museum-kyoto.com/>

参加館：大谷大学博物館、京都外国語大学国際文化資料館、京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、京都嵯峨芸術大学附属博物館、京都市立芸術大学芸術資料館、京都精華大学ギャラリーフロール、京都造形芸術大学芸術館、京都大学総合博物館、同志社大学歴史資料館、花園大学歴史博物館、佛教大学宗教文化ミュージアム、立命館大学国際平和ミュージアム、立命館大学アート・リサーチセンター、龍谷大学龍谷ミュージアム

国際平和ミュージアム 附属校平和教育実践展示7回目を迎えて

国際平和ミュージアム運営委員
一貫教育部部長 竹中宏文

立命館大学国際平和ミュージアムで立命館附属校(小学校・中学校・高等学校)が平和教育における取り組みを紹介する「立命館附属校平和教育実践展示」も、今回で7回目を迎えることとなりました。もともと、ミュージアム・リニューアルの際から立命館宇治の生徒達が作成した作品展示はあったものの、附属校とミュージアムが連携して協力できるものがないかと、ミュージアムのもとに附属校の教員が集まって、附属校平和教育研究会が立ち上げられたのが2006年。そのメンバーで、協力してミュージアムのワークシートをつくらうというところからスタートしましたが、翌年には、各附属校の実践をお互いに知るとともに広く紹介しようと、ミニ企画展示として、附属校平和教育実践展示を行うこととなりました。志としては、平和教育における一貫教育に挑戦しようという気持ちでスタートし、当時、「平和教育の一貫教育を目指して」というテーマで読売新聞の「教育ルネサンス」にもとりあげられました。

この間、毎年度、献身的にこの展示に向けて支えてくださったミュージアムの関係者の皆さまに感謝するとともに、我々の取り組みがどう波及してきたかを振り返ってみたいと思います。

この7年間で、各附属校の実践を紹介する取り組みもずいぶん充実してきたと感じていますが、一貫教育という意味では、立命館小学校の実践をまず取り上げたいと考えます。身近なところから平和を考えるというテーマで、その実践内容が定着するとともに、児童が平和を考える視座が明確になってきたと感じています。

立命館小学校の展示は「平和ポスター展」で、立命館小学校の児童は、立命科の授業の中で、平和について系統的に学んでおり、5年生の宿泊学習では広島平和記念資料館を訪問するなどして学びを深めているのですが、今回の展示では、6年生がこれらの学びを振り返りながら、図工科・立命科・社会科の授業で、ひとりひとりが平和について、その思いを、ポスターという手法を使って、表現するという学習の成果を発表しました。

見学者のご意見・感想にも、「LOVE + = HAPPINESS + SMILE」というのはとても現実的だなと思いました。愛だけではなく、それに何かプラスαをそれぞれ、各自に考えさせようと行動させようとする公式だと思います。」「小学生たちの純粋さが絵から見えます。自分は小学校の頃、外国人に会うのがとても珍しいことで、小さい時『国際』や『平和』などあまり考えていませんでした。小学校から異文化に接触させ、平和の意識をさせるには子供たちにとって視野を広げるいい手段だと思います。」「小学生1人1人が平和って何なのだろうか?と考え、自分なりの答えをみつけ、絵に描いているのだと感じた。鳩など、平和の象徴を描いてあったり、米や食事といった直接、平和とは関係ないと思われるものでも、実は平和と深く関わりあるものを描いてあったりで、平和というものはあらゆるものと関わりをもちつながっているのだと改めて感じられました。」というように、小学生の頃から、「平和=戦争がないこと」といったステレオタイプな視点でなく、身近

なあらゆるものから平和ということを考える視点が育ってきています。



立命館小学校「平和ポスター展」

立命館中学校・高等学校の展示は、中学2年生の沖縄平和研修の様子や課題研究報告をレポートで紹介するとともに、中学2年生から高校3年生までの生徒たちが実施したカンボジア・タイでのボランティア研修など、平和や国際貢献についての研修の様子を紹介しました。

立命館宇治中学校・高等学校の展示では、「第12回東アジア青少年歴史体験キャンプ」を通じて、2013年に日中韓の高中生が京都で交流し、立命館宇治中学校・高等学校の生徒が果たした役割、討議の様子や、その際に3国の参加学生で作成した「平和友好宣言」、および国際平和ミュージアム訪問レポートなどを中心に報告しました。

立命館守山中学校・高等学校は、中学校2年生における平和学習の取り組みと広島平和研修でのレポートなどを展示するとともに、高校3年生での「国際協力」の授業(選択科目)の取り組みを紹介しました。

立命館慶祥中学校・高等学校は、中高6カ年で取り組んでいる慶祥の平和学習を紹介するため、中2「メッセージタワー」、中3「戦時下の1人 レポート」「平和学習ディスカッションの成果」、高1「広島・長崎フォトエッセイ」、高2「世界で平和を考えるフォトエッセイ」、高3「アジア学 日中関係改善への意見」、および「平和」をテーマに制作した作品「バルサタワー」の展示を行いました。

いずれも、具体的なアクションから平和について考え、深める、さらにそれを発信する形が整えられてきており、見学者のご意見・感想からも、「附属校の生徒の皆さんが実際に現地に行って、平和の尊さや「生きる」ことの意味を自分なりに深く考えておられたのがとても印象に残りました。また、戦争経験者の方や被爆者の方へのインタビュー等がとても丁寧にとまめられていて、生徒の皆さんが平和について自発的に考えておられたことに感銘を受けました。心を震わせられる文章が多くて、展示を見て良かったです。」というようなご感想を多数いただきました。

小学校から高校までの平和教育の実践が定番化してきた今、そろそろ大学レベルでも、全学共通科目として「平和学」なり「平和研究」を設定するとか、何か創り出せないものか、立命館としての平和教育の一貫教育への挑戦をさらに飛躍させたいと考える今日この頃です。

第9回 神奈川県立地球市民かながわプラザ (あーすぷらざ)



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

日本平和博物館会議 (ロゴマーク)

館の概要

神奈川県立地球市民かながわプラザ（通称あーすぷらざ）は、平和、環境、貧困などの地球規模の課題の解決に向けて、日々の生活の中で考え、自分にできる身近なことから行動していくための総合的な施設として平成10年2月に開館しました。

1階「活動のフロア」では、NPO・NGOや各団体などの活動支援の場として大小13室の施設の貸出を行っています。

2階「情報・相談のフロア」では、世界の多様な文化に関する図書を所蔵し、ドキュメンタリーなどの2000点以上の映像作品を視聴できるほか、子ども向けの絵本やDVDなどを集めた子どもコーナーも充実した映像ライブラリー（専門図書室）があります。また情報フォーラムでは外国人相談窓口を設け、教育、一般、法律に関連した在日外国人への情報発信と活動の場を提供しています。

5階「体験・発見のフロア」の常設展示室は3室で構成され、「国際平和展示室」の他に、子どもたちの豊かな感性の育成し刺激するための「こどもファンタジー展示室」、世界の暮らしや文化を肌で感じる事が出来る「こどもの国際理解展示室」があります。



あーすぷらざ



あーすぷらざ外観

国際平和展示室

戦争がないというだけでは平和とは言えません。ここでは、過去の戦争を見つめ、現在の地球規模の課題を知り、地域からの国際協力を理解しながら未来を考えることができる展示を体験して頂きます。

○戦争の世紀

展示室入り口には、19世紀から20世紀初頭にかけての世界の大きな流れの中で日本の近代化とその後の戦争に至る流れを記した世界と日本の年表を掲示、また当時のメディア資料を通して、戦争の時代の流れを日本と世界の人々の視点で紹介します。

長くつらい戦争を神奈川県民の体験を通して紹介する事に重点を置き、戦時体制下の県民の暮らしを物語る実物資料や、横浜、川崎、平塚、小田原などの空襲と被害の様子を写す映像資料や、戦争体験者でもあるボランティアガイドが展示案内を行う日もあります。

特に第二次世界大戦中に世界の人々が体験した様々な苦痛と戦時下の暮らし（とりわけ犠牲やしわ寄せが集中した女性とこどもの姿）について知ること、生命の大切さ、平和の尊さについて考え



国際平和展示室

るきっかけとしていただけることを願っております。

終戦から戦後の復興の展示では、ようやく焼け跡の廃墟の中から復興に向けて歩み始めた県民の姿を、当時の県庁周辺を舞台にした模型に、子供を主人公とした映像を重ね合わせ、戦後の諸問題とくに食糧難や物不足、肉親の復員などの話をナレーション、実写フィルムなどを通して紹介しています。

○ともに生きる時代へ

展示室内のスロープを上った先からは、戦争の世紀ともいえる20世紀が終わり、次の21世紀が平和で人々が共に手を携えて生きる「共生の世紀」となるため、戦争の世紀を生きた世界の人々のさまざまな経験や教訓を紹介しています。

現代でも世界的なテロや国際紛争が発生している反面、その予防や解決のための国際的な枠組みでの努力、世界全体が国境を越えたグローバル化が進む中、日本の国際協力の現状や、貧困や難民、環境問題など世界の様々な問題の課題解決に向けた国連の働きなどを紹介しています。

また「一本の木の伐採」という映像では、熱帯林の伐採をテーマに、地球規模の課題、そこにある国際的な構造や多国間の係わり、北と南の問題など、環境問題について理解を深めます。

○平和への道

最後のコーナーの「地域からの国際貢献、地球市民として」では、神奈川県下のNPO・NGOの活動紹介を行うとともに、自分たちに今何が出来るのかを問いかけます。

このような展示から、子どもたちの「なぜ？」という疑問を自分自身の課題として見つめ直すきっかけづくりの場となるように、あえて結論を示さない方法で展示を行っています。

基本情報

- ◆館名 神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）
- ◆住所 247-0007 神奈川県横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1
- ◆電話 045-896-2121
- ◆館長 安部 晋弘（あべ くにひろ）
- ◆ホームページ <http://www.earthplaza.jp/>
- ◆開館時間 午前9時～午後5時（入場は午後4時30分まで）
- ◆休館日 月曜日（月曜日が休日の場合は開館）
12月29日～1月3日

◆展示室観覧料

個人

- 未就学児無料
- 小中学生100円
- 高校生学生など左記以外で20歳未満の方及び65歳以上の方300円
- 大人450円

団体（20人以上）

- 未就学児無料
- 小中学生80円
- 高校生学生など左記以外で20歳未満の方及び65歳以上の方240円
- 大人360円

来観者から学んで（戦時下の見直し）

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 布川 庸子

私は、いま、79歳。このごろはめっきり減りましたが、ガイドをはじめた1990年代には、私より年上の来観者が結構ありました。見学しながら知っていることや体験を話しかけて来られたりするので、こちらも耳を傾けました。

徴兵検査のこと、南京事件のこと、父親が教師で、教え子を満蒙開拓団に送り出して戦後ずっと悔やんでおられた事など心に残っています。そういう生の声は、限られた自分の体験だけでなく、自分の視野を広げてくれるものになり、もっと学習をという意欲を湧かせるものになりました。

私にとって一番強烈だったのは、大阪から来られた4歳年上の男性の話でした。

ガイド日記を繰ってみるとそれは2006年5月11日のことです。私は町屋の縁の所に立っていました。

「ああ、懐かしいですな」灯火管制の黒い幕を見上げて、その人は言われました。そうして振り向きざま「あんた！この畳の下に防空壕を掘ったのを知ってはいりますか」と聞かれたのです。「うちにもありましたよ」と答えました。そうして中学2年生のときの大阪空襲の体験を話してくださったのです。

「大阪中が燃えて、燃えて、熱いぐらいでした。でも幸い私のうちは助かったのです。あくる日学校へ行ったら、おまえたち今日は焼け跡の後始末だと言って町に行かされました。あんた、何をさせられたと思いますか？」

私の頭の中では、瓦の割れたのや、柱の燃え残りを集めてリヤカーなどでどこかに運ぶのかなという事ぐらいしか思いつきませんでした。

「あの畳の下に防空壕に入っていた人は、みんな蒸し焼き状態で折り重なって亡くなっておられました。トタンを持ってきてその死体を引っ張り上げて、焼き場に運ばされたのです。火傷ですやろ。手を持ったらずるっと皮膚がめくれますねん。私はこの年になってもあの時の手の感覚が甦ることがあります。子どもにあんな仕事をさせてはいけません。戦争はしたらあきません」そうやってその人は向こうに行ってしまうました。私にとっては衝撃的な話でした。戦後60年余り何も知らなかったのですから。

その防空壕の話から私の戦時下にやらされたことの見直しが始まりました。

私の2年生の絵日記には9月25日に防空壕を掘ったというページがあります。1年生の絵日記には遊んだことばかり書いてあるのに、2年生からは戦時色が出てくるのです。

2年生と言えば1942年。つまりその年の6月5日にミッドウェー海戦があり、日本は大敗を喫していたのです。負けている事は隠されました。しかし、上層部はアメリカがもっと攻めて来る事は予想がついたと思います。それから隠蔽と騙しが始まったことが解ります。

「備えあれば憂いなし」の掛け声の下、やらされた様々な事が思い出されるのです。

「なんだ 空襲」という歌も盛んに流されました。国民にやらそうとしたことがみんな盛り込んである歌です。「何の敵機も蚊とんぼ とんぼ」というくだりがありますが、しっかり憶えているのは盛んにラジオから流されたからでしょう。（山田耕筰作曲）

ミュージアム展示室には京都市が出した“待避所の作り方”という印刷物があります。きっと回覧板で回ってきて、うちも掘ったのでしょ。市が発行しているという事は、上意下達、やりなさいという命令です。

やらされたことがすべてというほど命を守ることに繋がっていなかったことが分かります。この事はどうしても伝えたくまりました。先ず絵を描くことを思い立ち床下の防空壕を描いてみました。

9月はガイドが少ないので家にいるときは絵に没頭しました。

1枚描くと、次々思い出されるのです。バケツリレー、避難の姿勢、もんぺ姿などなど。19枚になりました。

それから町屋で絵を見せながら、戦争の経過や市民がやらされたこと、それが命を守ることに繋がらなかったことなど話すようになったのです。

負けていることを徹底して隠蔽された事は今の秘密保護法が、権力者の保身に繋がるのではないかと心配されるのです。また原発の安全神話をふりまいて、沢山作ったのも体質的に根底が同じものなのではないかと思うのです。

もう子どもは50歳。戦争に駆り出される年ではありません。ひたすら孫の世代に、国家権力が市民の命をうばったりすることがないように平和の仲間を増やしたいのです。



待避所の作り方（立命館大学国際平和ミュージアム所蔵）

2013年4月
～2014年1月
入館者状況

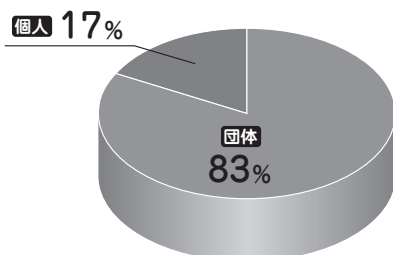
◎開館日数

245日

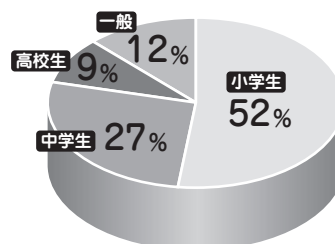
◎オープン後常設展入館者数累計

888,043名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2012年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	人数計(名)
総入館者数		1,711	5,382	5,139	2,400	2,738	2,917	10,051	8,149	4,194	1,113	43,794
特別展	春季特別展 『ジミー・ツトム・ミリキタニ回顧展-日系人強制収容所と9.11を体験した反骨のホームレス画家』	(5/14～7/20)										9,330
	特別展 『世界報道写真展2013 -WORLD PRESS PHOTO 2013-』	合計(3会場)										10,507
	京 都 (立命館大学衣笠キャンパス)	(9/18～10/13)										6,187
	滋 賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス)	(10/15～10/31)										2,132
	大 分 (立命館アジア太平洋大学)	(11/3～11/17)										2,188
特別展示	秋季特別展 『目・耳・WAR—総動員体制と戦意高揚』	(10/23～12/15)										13,780
	小 計											33,617
特別展示	ロビー展示「Picture for Peace Unoy (The United Network of Young Peacebuilders)」	(6/1～6/30)										オープン
	(若者による平和のコンクール優秀作品展) (国際平和ミュージアム 1階ロビー)											
特別展示	ロビー展示「学徒出陣70年 学生・大学と戦争」											
	京 都 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(11/19～12/15)										オープン
特別展示	滋 賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス メディアセンター 1階)	(1/9～1/31)										オープン
講演会 ほか	第8回国際平和・人権連続セミナー～平和の諸相を見る～ (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(4/23)										97
	『アジアの平和に向かって—東アジア共同体(EAC)の展望と平和研究の課題—ヨハン・ガルトウング博士とモンテ・カセム館長の対話』											
講演会 ほか	ボランティアガイド学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(5/18)										58
	『立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること』 講師：安斎育郎名誉館長											
講演会 ほか	学生ミュージアムスタッフ学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(6/1)										22
	『児童労働について知っていますか？～ボーンフリーアートの活動を通じて～』											
講演会 ほか	講師：ジョン・デバラジ氏 (ボーンフリーアートスクール創設者)											
	ジミー・ツトム・ミリキタニ回顧展関連企画 映画上映会「ミリキタニの猫」 (衣笠キャンパス 充光館301号教室)	(6/15)										217
講演会 ほか	解説：米山裕氏 (立命館大学文学部教授)、和泉真澄氏 (同志社大学グローバル地域文化学部教授)											
	NGOワークショップ 『アムネスティ・インターナショナル日本「子ども兵士」について考えよう』	(7/6)										22
講演会 ほか	講師：佐野陽子氏 (アムネスティ・インターナショナル日本会員) (国際平和ミュージアム 2階会議室)											
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？2013～電気について考えてみよう！！ (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(7/26)										39
講演会 ほか	小・中学校教員対象下見見学会	(4日間：7/30、7/31、8/27、8/30)										151
	ボランティアガイド学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(9/21)										42
講演会 ほか	『広島・長崎への原爆投下の真実と和解を求めて—日米学生平和の旅を終えて考えたこと』											
	講師：藤岡淳氏 (立命館大学経済学部教授)											
講演会 ほか	『世界報道写真展2013』公開記念講演会											
	『報道カメラマンの視点で見た世界の暴力と戦争の構造と平和』 講師：会田法行氏 (フォトグラファー)											
講演会 ほか	【京都会場】衣笠キャンパス 存心館701号教室	(10/1)										284
	【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス コーニングハウスⅠ303号教室	(10/22 1日2回実施)										484
講演会 ほか	NGOワークショップ 『与える支援から自立に向けての支援へ—コメ銀行を通して考えよう！—』	(11/30)										20
	講師：平野将人氏 (日本国際ボランティアセンター ラオス事業担当) (国際平和ミュージアム 2階会議室)											
講演会 ほか	ボランティアガイド学習会 (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(12/14)										58
	『子どもたちへの平和教育 “性奴隷制をどう伝えるか”』											
講演会 ほか	講師：池田恵理子氏 (アクティブ・ミュージアム「わたしの戦争と平和資料館 (wam)」館長)											
	小 計											1,494

編集
後記

「巻頭つれづれ」では、「初期館長・加藤周一さん没後5周年」について国際平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎氏が執筆されています。加藤氏が都立中央図書館館長をされていた中で、「安斎さんが一緒なら」という条件で国際平和ミュージアム初代館長を引き受けられたエピソードや、『加藤周一最終講義』という本の紹介など、興味深い内容です。

本と言えば副館長の加國尚志教授がハンナ・アーレント著『全体主義の起原』の本をミュージアムおすすめの一冊として紹介されています。特定秘密保護法が出された今日、歴史の中で日本のあり方を考えさせられる本の紹介です。

展示では、特別展の世界報道写真展について、見学者の感想も載せられています。この展示は英語でも解説されていたので、多くの留学生や外国人数員も見ることができました。私は留学生や日本人学生を対象に平和学を担当していますが、一枚の写真を見て、ある問題の原因を考え、どのようにしたら良いのかを書いてもらい、それを皆で共有しました。たった一枚の写真が多くのことを考えさせ感じさせてくれると、改めて思いました。

また秋季特別展の「目・耳・WAR—総動員体制と戦意高揚—」の内容も充実しており、あるオーストラリアの訪問者は大変感動されていました。

またミニ企画展では、立命館附属校における平和教育実践展示7回目の展示が行われことが記されています。元国連事務次長アンワルル・チャウドリー博士が国際平和ミュージアムを訪問された時案内しましたが、生徒の展示がとても印象的であったと言われたことを思い出しました次第です。 山根和代

ミュージアムインフォメーション

特別展

奪われた野にも春は来るか チョンジュ ハ 鄭周河写真展

会 期：2014年5月3日(土)～7月19日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

休 館 日：月曜日、祝日の翌日(但し、5月5日(月・祝)は開館、5月6日(火)は休館)

参 観 料：大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、小学生200円(150円)

※先に地階受付で参観料をお支払いください。上記()内は20名以上の団体料金です。

※国際博物館の日 5月18日(日)は入館無料です。

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム 共 催：鄭周河写真展実行委員会

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会

KBS京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社

協 力：立命館大学コリア研究センター

開催趣旨

韓国の写真作家、鄭周河(チョン・ジュハ)は、2011年11月、原発事故後の福島被災地を撮影し、「奪われた野にも春は来るか」と題する写真集を発表しました。日本の事故以前から韓国の原発にも関心を寄せていた彼の作品は、被災地の厳しくも美しい風景を静かに映し、見る者を深い省察へと導きます。原発事故から3年が経ち、確かな議論を経ずに原発再稼働へ向かうのではなく、境界を超えた対話と平和のための思索の契機となることを願って開催します。また、会期中には作家やパネリストを招いた企画も実施します。



© 정주하鄭周河2012

関連企画

※申込不要

要参観料

●オープニングトーク※通訳あり

日時：5月3日(土) 13:30～15:30

会場：中野記念ホール

内容：鄭周河(写真家)

×徐京植(作家)

×河津聖恵(詩人)

●トークセッション

日時：6月7日(土) 13:30～15:30

会場：中野記念ホール

内容：高橋哲哉(東京大学教授・哲学)

×庵逄由香(立命館大学准教授・朝鮮史)

×学生からの発言

参加無料

●トークイベント(予定)

日時：展示期間中

会場：ミュージアム会議室

または1階ロビー

内容：本学教員×本学学生

「世界報道写真展2014」—WORLD PRESS PHOTO 2014—

京都会場 会 期：9月17日(水)～10月12日(日) (立命館大学国際平和ミュージアム)

滋賀会場 会 期：10月14日(火)～10月30日(木) (立命館大学びわこ・くさつキャンパス)

大分会場 会 期：11月2日(日)～11月16日(日) (立命館アジア太平洋大学)

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した写真展で、今年で57回目を迎えます。立命館大学では、1995年より毎年開催しています。

この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにしたいதாகたく開催するものです。



「世界報道写真大賞」
ジョン・スタンマイヤー(アメリカ/2013)
夜、ジブチ共和国ジブチ市の海岸沿いで近隣
国ソマリアからの安価な携帯電話の電波(国
外にいる親戚との微弱な繋がり)を捉えよう
とするアフリカの移民たち。

●詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

第84回ミニ企画展示

●第19回ミュージアムロード参加企画

京都青春時代 パート2—学生と高度経済成長の風景— **開催中**

会 期：2月8日(土)～3月30日(日)

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

昨年のミニ企画展示「京都青春時代—学生と戦争の風景—」でとりあげた時代から30年後の1960年代末～70年代にかけての京都の大学生の様子を紹介。

第85回ミニ企画展示

●ベトナム戦争の傷痕

会 期：2014年4月3日(木)～4月29日(火・祝)

主 催：村山康文写真事務所

共 催：立命館大学国際平和ミュージアム

ベトナム戦争終結後のめざましい経済発展の影で、戦争の傷を負いながらもひっそりと今を生きる人々の想いに迫る村山康文の写真展。

第86回ミニ企画展示

●ロベルト・ユンクの生涯

「ヒロシマを世界に伝える—核の被害なき未来を求めて—」

会 期：2014年5月13日(火)～6月1日(日)

主 催：ユンク科研グループ

共 催：立命館大学国際平和ミュージアム、広島平和記念資料館

ヒロシマに学び反核・平和から脱原発・緑の運動へ、核被害なき未来を求めたロベルト・ユンクの生涯をたどる巡回展。

夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2014

2014年7月26日(土)

夏休みに親子で一緒に見て・感じて・考えて! 平和について学びましょう!! 国際平和ミュージアムの館長による平和のお話や、大学生のお兄さん、お姉さんと一緒に平和や私たちの暮らしについて学ぶことができます。夏休みの自由研究にも役立つ企画を予定しています。

教員下見見学会

2014年7月29日(火)～31日(木)、8月1日(金)、8月26日(火)～29日(金)

※参加状況により開催日を変更する場合があります。

夏休みに小学校・中学校の先生方を対象として下見見学会(無料)を開催いたします。京都への修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。見学会では、平和講義体験、学習教材キットを使った授業体験、ボランティアガイド解説つき見学、個別相談会を行ないます。

「平和って なに色?」一字で表す平和へのメッセージ

会 期：2014年10月26日(日)～11月2日(日)

2005年文字・活字文化振興法の施行により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。



「大学祭での演劇公演をめざしての合宿」
(1969年) 個人蔵



ロベルト・ユンク (1913-1994)
ロベルト・ユンク未来問題図書館蔵



2013年度夏休み親子企画の様子

〈下見見学会プログラム〉

平和講義

ガイド付
展示見学

教材キット
授業体験

個別
相談会

第21巻第3号 (通巻61号) 2014年3月7日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>